

道院だより

No.31

金剛禅総本山少林寺 埼玉北浦和道院

2011年 6月7日(火) 発行

文責 道院長 梶谷 憲 皇

合掌

武の意義と武道の本質

開祖は、少林寺拳法教範(上巻 p129)で、“武の意義”を、

「武という字は、戈と止むの二字よりなる会意文字である。(中略)武の本義は、人と人との争いを止め、平和と文化に貢献する、和協の道を表した道徳的内容をもつものであり、いたずらに敵を殺し、争闘を求め、敵に勝つことのみが目的ではないのである。」

と述べています。また、“武道の本質”とは、

「(前略)故に、真の武道と云うのは、争いを求め、相手を倒し、自己の名誉や、自身の幸福のみを追求する道ではなく、人を生かして我も生き、人を立て我も立てられるという、自他共楽を理想とする道を云っているものであり、武の体を武の用たる修身、除恶、治乱、益世の目的に合一させる、処世の根元となるべき、人づくりの大道でなければならないのである。」

と言っています。つまり、武道とは本来、身に付けた武の体(技術略)を、争いに用いるのではなく、争いを止め、世のため人の為に用い、世の中の不正や悪に立ち向かえる勇氣と行動力を持った「人づくり」の大道なのです。そして、開祖は、

「真の武道の在り方と云うのは、人を倒し、人を殺す技術を修める道としてではなく、“己を修め、己に克ち、人を生かして己も生きる。”と云う濟世利民の道でなくてはならぬことが理解される筈である。」

と述べ、少林寺拳法の目指す「自己確立」と「自他共楽」の道こそを、武道の本来の道であると明確に示しています。我々は何の為に少林寺拳法を修行しているのか、それはまさに、この武道の本質と同じです。“己こそ己の寄るべ、己をおきて誰に寄るべぞ、良く整えし己こそ、まこと得がたき寄るべなり”というように、確かな拠り所となるべき自己を確立し、“半ばは自己の幸せを、半ばは他人の幸せ”を本気で考え、行動できる、愛と勇氣と行動力と慈悲心を持った“人”づくりこそ、少林寺拳法の目的なのです。

さて、ここで大切な事が、釈尊の教えの1つ、「八正道」です。以前も紹介しました。“正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定”です。その八正道の最初の「正見」こそ、実はもっとも大切なものなのだと思います。そしてまた、最も困難な事でもあります。

「正見」とは、物事を、偏見なく、真実を、本質を正しくとらえるということですが、これが難しい。人間、どうしても、物事を見る時、先入観や偏見の目で見えてしまいます。先入観や偏見というのは、それまでの、いろいろな経験や体験、環境や情報等で、自らの内に形成されている「物の見方」や「価値観」ですね。そういうものを拭き去る事はなかなかできません。今回の東日本の大震災についても言えることです。「M9クラスの大きな地震は起きるはずがない。」「10mを超える津波などありえない。」「原発は安全でクリーンなエネルギー。」など、いつの間にか私達の中に形成されていた先入観や偏見と言っているのではないのでしょうか。そうしたことが、“常識”として、私達の中に構築され、やがてそれを疑わなくなってしまう。つまり、“本質”を見ることをしなくなっていたということが、今回の大災害を防ぐ事ができなかった1つの要因のような気がします。

“批判的精神”の喪失です。物事を、悪い意味ではなく疑って見ることをしなくなっていたのです。“批判的精神”とは、「本当にそうなのかな。」「これって正しい事かな。」逆に、「本当にこれって間違っているのかな。」という疑問を常に持つということです。こういう姿勢は、実は、物事の本質に気付くと言う意味ではとても大切な事なのだろうと思います。正しく物事を見て(正見)、正しく判断し(正思)、正しく発言し行動する(正語、正業)ことが、自他共楽の理想境を目指していく上では、とても大切な自己の在り方なのだと思います。

結手

事務連絡

① 一般財団法人少林寺拳法連盟への入会兼籍手続きのお願い。

連盟への入会を裏面の案内に従ってお願いします。入会されないと、各種大会への参加ができなくなります。ご不明な点は、梶谷までご連絡ください。